

あり、特に核DNA量は最も強い独立した再発因子であった。

12. 早期肺癌61例の臨床的検討 佐賀県立病院好生館外科

里 学, 古川次男, 吉田猛朗
当院における過去13年間の原発性肺癌手術例379例中、いわゆる早期肺癌の定義を満たす症例は61例(16%)であった。肺野型51例、肺門型10例で、組織型では腺癌43例、扁平上皮癌15例、その他3例であった。早期肺癌全体の5年生存率は90%で、肺門型100%、肺野型87%であった。61例中異時性の肺多発癌の発生が3例にみられ3例とも第2次術を行った。他臓器との重複癌は4例にみられた。

13. 胸骨正中切開経路による肺癌・縦隔郭清の意義 長崎県立島原温泉病院外科

篠崎卓雄, 松尾繁年, 山口 聡
松川俊一, 宮本俊吾
胸骨正中切開経路(MS)による肺癌切除25例のうち、縦隔郭清を目的とした16例を対象にした。c-stage I, II, c-N0, N1の左肺癌ではMSによってR2a以上が、c-N1, N2の右肺癌ではR3bが得られる。

14. 女性肺癌手術例110例の臨床的検討 佐賀県立病院好生館外科

加瀬真一郎, 古川次男
吉田猛朗
当院での過去13年間の原発性肺癌手術例のうち、女性肺癌110例について男性肺癌症例と比較しつつ、臨床的検討を行った。組織型は男性肺癌では、腺癌45%、扁平上皮癌38%に対し、女性肺癌は腺癌が84%をしめており、その内訳は高分化型68%、中低分化型30%、その他2%であった。69%の症例が自覚症状がなく、検診や胸部X線の異常

で発見されている。病期I期が全体の58%を占め、男性に比べ比較的早期の肺癌が多かった。切除例の5年生存率は女性肺癌60%、男性肺癌48%と男性肺癌に比べ良い傾向にあった。分化度別5年生存率は高分化腺癌が71%、中低分化型腺癌41%で高分化型腺癌の予後が良かった。

15. 肺門部早期肺癌切除例の検討 大分県立病院胸部外科

中村昭博, 内山貴堯, 山岡憲夫
井手誠一郎, 山下秀樹
肺門部早期肺癌切除例16症例を経験した。カルチノイドの59歳女性1例の他は全て扁平上皮癌であり、62歳以上の重喫煙男性であった。自覚症状発見が3例、喀痰細胞診による検診発見が13例。全例に葉切除およびR2a以上のリンパ節郭清術を施行し、5例に気管支形成術を行った。3例の他病死を除くと、2年後に第2癌の切除を行った1例を含め、全例非担癌生存中である。喀痰検診の重要性と外科治療の有効性が示唆された。

16. 19歳女性の若年性肺癌

長崎大第2内科 濱岡昭博
中野令伊司, 藤野 了
檜崎史彦, 高谷 洋, 岡三喜男
原 耕平
症例は19歳女性。1994年、学校検診で右上葉に約1cm径の結節影を指摘された。画像では、右S3b胸膜直下に境界明瞭な孤立性結節影を呈した。自覚症状もなく、血清学的検査もすべて正常。気管支鏡検査と経皮的肺吸引生検でも確定診断に至らず、胸腔鏡下肺生検を施行した。術中の迅速標本で悪性の診断を得、上葉切除を施行した。術後診断は、低分化腺癌で臨床病期I期であった。42歳の母親に肺癌が

あり、発生に遺伝的素因が疑われた。

17. 胸水を伴い急速に増大した肺巨細胞癌の1例

大分医大第2内科 串間優子
仲間 薫, 河野 宏, 山崎 透
長岡博志, 永井寛之, 橋本敦郎
後藤陽一郎, 那須 勝
同 第1病理 鳥谷 弘
同 中央検査部 林田蓉子
横山繁生, 伊東盛夫
肺巨細胞癌の1例を経験した。症例は69歳、男性。平成5年12月、当科にて膜性腎症と診断。加療中に間質性肺炎を併発したが、胸部レ線所見は間質性肺炎の所見と両側胸水のみで、気管支鏡検査も内腔に異常は認めなかった。平成6年10月、前胸痛・呼吸困難を認め来院。胸部レ線・CTにて左肺門部より縦隔に進展する腫瘍を認めた。胸水細胞診にて奇怪な多角の巨細胞を認め、剖検にて肺巨細胞癌と診断された。

18. 特発性間質性肺炎に合併し、多発性消化管転移をきたした原発性異時多発性肺腺癌の1例

宮崎医大第3内科
芦谷淳一, 増本英男, 飯干宏俊
谷口治子, 迎 寛, 松倉 茂
症例は75歳男性。特発性間質性肺炎に合併した右S⁹原発の低分化型肺腺癌(臨床病期T1N3M0, stageIIIb)と診断し、化学療法を実施したが無効であった。経過中に左S⁶に新たな腫瘍影が出現。約15ヵ月後、吐血ならびに消化管穿孔をきたし死亡。剖検にて右S⁹の低分化型腺癌に加え、左S⁶に高分化型肺腺癌を認めた。吐血は胃転移、また消化管穿孔は小腸転移によるもので、いずれも低分化型肺腺癌の転移巣であった。また両肺にUIPの